

独思録：「民主党代表交代劇と副官房長官辞任劇」(5/17)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

民主党の代表選びを、「トーナメント」に見立て、「小沢代表という出場しない騎士の名ばかり取りざたされる奇妙なトーナメント」と毎日新聞の余禄は書いています。

騎士道精神というと、アーサー王伝説を思い出します。日本で最初にアーサー王伝説に興味を持ち、日本語で紹介したのは、夏目漱石の「薙露行(かいろこう)」という短編小説だそうです。

『薙露行』は以下の行で始まります。

「世に伝うるマロリーの『アーサー物語』は簡浄要素僕(そぼく)という点において珍重すべき書物ではあるが古代のものだから一部の小説として見ると散漫の譏(そしり)は免がれぬ。まして材をその一局部に取って纏(まとま)ったものを書こうとすると到底万事原著による訳には行かぬ。従ってこの篇の如きも作者の随意に事実を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりしてかなり小説に近いものに改めてしもうた。主意はこんな事が面白いから書いて見ようというので、マロリーが面白いからマロリーを紹介しようというのではない。そのつもりで読まれん事を希望する。

実をいうとマロリーの写したランスロットは或る点において車夫の如く、ギニヴィアは車夫の情婦のような感じがある。この一点だけでも書き直す必要は充分あると思う。テニソンの『アイジルス』は優麗都雅の点において古今の雄篇たるのみならず性格の描写においても十九世紀の人間を古代の舞台に躍(おど)らせるようなかきぶりであるから、かかる短篇を草するには大(おおい)に参考すべき長詩であるはいうまでもない。元来なら記憶を新たにすため一応読み返すはずであるが、読むと冥々のうちに真似(まね)がしたくなるからやめた。」

民主党の代表選び、この漱石の『薙露行』を借りて書くと、

「世間に伝うる西松建設の『献金物語』は国民の意識とは全く乖離しているという点において、情報開示すべき事件ではあるが、賄賂として検察も立件できぬものだから、政治資金の虚偽記載の違反だけとして見ると、選挙をターゲットにしたとの譏は免がれぬ。まして材をその一局部に取って纏(まとま)ったものとして、秘書以外の責任を問おうとすると到底万事検察の思うような訳には行かぬ。従ってこの篇の如きも検察の随意に事実を前後したり、場合を創造したり、性格を書き直したりしたが、結局、政治資金の虚偽記載の違反だけのものに改めてしもうた。」

となり、総選挙に不利との情勢判断から、小沢前代表の明快な説明もなく、辞任・代表選びに至ったようです。

この民主党代表選びに対し、自民党の方から、町村信孝前官房長官は「新代表は党を挙げて、小沢氏の 献金問題の解明から始めてもらわないといけない」、古賀誠選挙対策委員長は「小沢氏の辞任会見は誠に不誠実だった。代表選も強硬なスケジュール作りで、古い

自民党を見ているような気がした」、町村信孝前官房長官は「新代表は党を挙げて、小沢氏の献金問題の解明から始めてもらわないといけない」、古賀誠選挙対策委員長は「小沢氏の辞任会見は誠に不誠実だった。代表選も強硬なスケジュール作りで、古い自民党を見ているような気がした」と語っているそうですが、安倍・福田両（元・前）総理の辞任劇、国民からみて、果してそんなことを言えた柄かとも言いたくなり、正に天に向って唾している輩としか見えません。

しかも、アーサー王伝説と同じように、「王妃ギニヴィアと騎士ランスロットの不義の愛」の一節のように美しく叙事詩的に語ることはできず、

「実をいうと熱海事件で辞任・雲隠れした鴻池前官房副長官は、あらゆる点において不適任の如く、任命責任はないと答弁した首相も、更に、認識不足のような感じがある。この一点だけでも言い直す必要は充分あると思う。各紙のコラムは優麗都雅の点において昨今のクオリティー・ペーパーのコラムたるのみならず、性格の描写においても今世紀の社会を古代の舞台に躍らせるようなかきぶりであるから、対抗してかかる駄文を草するには大に参考すべきであるというまでもない。元来なら初心を新たにするため一応読み返すはずであるが、読むと冥々のうちに真似がしたくなるからやめた。」

ということになり、政界の情報開示の身勝手さに、腹膨るる思いです。

#### < 薙露行 >

アーサー王伝説を題材にした夏目漱石の短編小説で、「吾輩は猫である」を執筆していた同じ時期に一週間で書き上げた作品です。

この作品はマロリーの「アーサー王の死」、テニスの「国王牧歌」の一節にある「ランスロットとエレイン」を典拠に用い、王妃ギニヴィアと騎士ランスロットの不義の愛と、ランスロットに恋する乙女エレインの愛と死を主な内容にしており、「トリスタンとイゾルデ」や「パオロとフランチェスカ」などと同じく近代ロマン主義が復活させた中世ヨーロッパの愛の伝統に根ざした作品となっています。

「薙露行」は、夢・鏡・袖・罪・舟の5章からなる作品で、第2章（鏡）はテニスの「シャロットの女」を基にしてシャロットの女を語り、第3章（袖）で可憐なエレインを述べ、第5章（舟）においてランスロットへの愛ゆえに息絶えたエレインの遺骸が小舟に乗せられてキャメロットへ向かうことで、この叙事詩を纏めています。



アーサー王伝説



第2章(鏡)



第5章(舟)

<夏目漱石(1867-1916)>

小説家、評論家、英文学者。俳人(俳号は愚陀仏)。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。



大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学)英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。

毎日:「世論調査:首相にふさわしいのは鳩山氏34%麻生氏21%」(5/17)

16日の民主党代表選で鳩山由紀夫氏が選出されたのを受け、毎日新聞は16、17日、緊急の全国世論調査を実施した。麻生太郎首相と鳩山氏のどちらが首相にふさわしいかを聞いたところ、鳩山氏との回答が34%で、麻生首相の21%を上回った。次の衆院選で勝ってほしい政党の質問では民主党が56%で、代表選前の12、13日に行った前回調査比11ポイント増となり、自民党の29%の2倍近くに達した。民主党は小沢一郎前代表の公設秘書逮捕で傷ついた党のイメージを小沢氏の辞任と代表選の実施によって回復させたといえそうだ。

4月に麻生首相と小沢氏についてどちらが首相にふさわしいかを聞いたときは、首相が21%で小沢氏は12%だった。秘書逮捕前の2月調査では小沢氏が25%で首相の8%を上回っていたが、今回の鳩山氏の34%はこのときの小沢氏を超えた。ただ「どちらもふさわしくない」との回答が42%で最も多かった。衆院選で自民、民主のどちらに勝ってほしいかの質問でも、民主は2月の51%を上回った。政党支持率では民主が30%(前回24%)、自民が23%(前回27%)と逆転。民主は2月の29%とほぼ同じレベルまで回復した。「支持政党なし」の無党派層は37%だった。

ただ、鳩山代表に期待するかどうかの質問では「期待する」と「期待しない」がともに49%で拮抗(きっこう)。小沢氏の辞任と鳩山代表の就任で民主党に対する評価が変わったかについても「変わらない」が68%に達した。秘書が逮捕・起訴された西松建設事件に関する小沢氏の説明不足や、鳩山氏に「小沢後継」イメージが強いことが影響しているとみられる。



<b>首相にふさわしいのは</b>		<b>衆院選で勝ってほしいのは?</b>	
麻生首相	21	自民党	29(34)
鳩山代表	34	民主党	56(45)
<b>鳩山代表に期待しますか?</b>		<b>麻生内閣を支持しますか?</b>	
期待します	49	支持	24(27)
期待しません	49	不支持	58(52)
<b>民主党の評価は?</b>		<b>主な調査結果</b>	
上がった	17	※数字は%	
下がった	13	カッコ内は前回調査	
変わらない	68		

朝日：「鴻池氏、議員パスで女性と熱海旅行 副長官辞任の公算」(5/13)

鴻池祥肇（よしただ）官房副長官（68）＝参院兵庫選挙区＝が4月28～30日、知人の女性と静岡・熱海に旅行し、国会議員の公務用に支給されるJRの無料パスを使っていたことが報じられることが明らかになった。与党内でも問題視する声が強まり、鴻池氏は副長官を辞任する公算だ。



麻生首相も慰留しない見通し。民主党の小沢代表の公設秘書逮捕後、内閣支持率は回復傾向にあったが、首相側近の不祥事で打撃は避けられそうにない。

週刊新潮（5月21日号）が報じる。29日は祝日だが、政府が新型インフルエンザ対策に取り組んでいる最中だった。鴻池氏は同誌の取材にパス使用を認めた。自民党幹部は12日夜、「（辞任しないで）もつわけがない。一番まずいのは、JRのパス券を使ったことだ」と指摘。三役経験者も「鴻池氏は明日辞めるだろう」と語った。後任には同じ麻生派参院議員の浅野勝人氏が有力視されている。

鴻池氏は1月にも知人の女性を参院議員宿舎に宿泊させ、カードキーを貸与したと週刊新潮に報じられた。この時は鴻池氏は宿泊やキーの常時貸与を否定し、首相も問題視しない考えを示していた。

### 春秋：「なぜあのタイミング」(5/13)

その振る舞いも胸のうちもこれほど分かりにくい政治家はいないという。民主党代表を辞める小沢一郎氏だ。ふだんから隠密行動に徹し、次に何をやり出すのか予測不能。辞任の記者会見も案の定、スッキリした中身とは言えなかった。

正体が分からず隠密ぶりが際立つのは、結果的に小沢氏を退散させた検察も同じかもしれない。捜査は密行が大原則とあって半端な取材では感触もつかめない。楽屋オチになるが、事件の行方を探ろうとして途方に暮れた先輩同輩は数知れず。気を抜いていたらある日突然、爆弾発表があったりするから恐ろしい。

西松建設の巨額献金事件もまだ何かある、と勘繰りたくなるけれど、どうやら与党政治家サイドの捜査は難航しているらしい。そもそも、なぜあのタイミングである容疑で小沢氏側だけの立件だったのか。検察の身内からさえ批判の絶えないありさまである。このままなら東京地検特捜部の看板も傷ついてしまう。

じつは隠密捜査とは無縁の、いたって分かりやすい制度が今月 21 日から始まる。市民でつくる検察審査会の権限が強まり、検察が不起訴にしても審査会が 2 度続けて起訴すべきだと議決すれば必ず起訴されるのだ。与党政治家側への献金疑惑にもこの仕組みは当てはまるという。やはり事件は終わっていない。



< 小沢一郎 (1942-) >

民主党前代表。衆議院議員 (13 期)

東京市下谷区 (現在の東京都台東区) 御徒町生まれ。本籍地は岩手県奥州市 (旧水沢市)。

慶應義塾大学経済学部、日本大学大学院法学研究科へと進学。大学院在学中の 1969 年 (昭和 44 年) 第 32 回衆院選に旧岩手 2 区から自由民主党公認で立候補し、27 歳の若さで当選。

自民党総務局長、衆議院議院運営委員長を経て、1985 年 (昭和 60 年) に第 2 次中曽根内閣第 2 次改造内閣で自治大臣兼国家公安委員長として初入閣。

自由民主党幹事長、新生党代表幹事、新進党党首 (第 2 代) 自由党党首を歴任。

### 天声人語：「ぬしに豹変」(5/14)

「主」と書いて「あるじ」とも「ぬし」とも読む。この二つは似て非なるものだと、以前どこかで読んだ覚えがある。「あるじ」は「一国一城の主(あるじ)」のように表立った存在だ。ところが「ぬし」とくれば、「古池の主(ぬし)」などと言われるように、隠然としておどろおどろしい。

民主党の小沢代表は、一夜にして党の「あるじ」から「ぬし」に豹変(ひょうへん)したようだ。二役だったのが、代表辞任を表明して「あるじ」の仮面がとれたということか。「院政」を思わせるような君臨ぶりが報じられている。

党の会合も剛腕で仕切ったそう。異論の者をにらみつけ、自ら「異議なし！」と大声を上げたりしたと伝わる。「本当に怖い」「猛獣が野に放たれた」。党内から漏れる声を聞けば、辞任会見で言っていた「民主主義」とは何かと思う。

そんな「ぬし」の潜む池で、土曜には後任の代表選がある。「ぬし」に近い鳩山幹事長と、距離を置く岡田副代表が争う見通しだ。いっとき政権交代への光に満ちた池も、いまや霧に煙る。覆う雲は厚くなるばかりだ。

下馬評では優勢な鳩山氏は、自民党にも「待望論」があるそう。小沢氏を支えてきたうえ、政策も似ているから攻めやすい。鳩ならぬカモということか。名家の4代目議員というネギも背負っている。

民主主義は文字どおり、民が「あるじ」となる政治である。投票とは、自分たちの政府をつくり出す営みにほかならない。その可能性を国民に見せた勢いは民主党に戻るのか。うっちゃり相撲の回しを与党の両手がぐいとつかんでいる。

< 鳩山由紀夫 (1947-) >

衆議院議員(7期)。民主党前幹事長。

東京都文京区生まれ。東京大学工学部卒。スタンフォード大学博士課程修了。同大 PhD。1986年、自民党公認で北海道から第38回衆議院議員総選挙に出馬し当選。

1993年政治改革を巡り自民党を離党。武村正義らと新党さきがけを結成し代表幹事。総選挙後、成立した細川護熙内閣では、内閣官房副長官に就任。

その後も民主党内で最大グループ「政権交代を実現する会」を率いる。



< 岡田克也 (1953-) >

衆議院議員(6期)。民主党副代表。三重県四日市市に生まれ。

東京大学法学部を卒、1976年通商産業省入省。1985年に米国ハーバード大学国際問題研究所に派遣。1990年自由民主党から第39回衆議院議員総選挙に出馬、当選。

1993年、宮澤内閣改造内閣不信任案賛成し羽田、小沢に従って新生党に移り、その後新



進党、国民の声、民政党を経て民主党結成参加。民主党元代表（4代）。

内政においては「自由で公正な社会」を標榜する一方で、「実質的な機会の平等」を実現と教育の重要性を説き、外交においては日米同盟を基軸としながらも、アジア重視の姿勢を見せる。

### 編集手帳：「品位に欠ける格言」(5/15)

米国の第36代大統領リンドン・ジョンソンは語ったという。攻撃的な言動で知られた政府高官を、大方の予想に反して再任した時である。小便は外から室内にされるよりも、室内から外にされるほうがいい と。

民主党の代表選に、このいくらか品位に欠ける格言を思い浮かべた。いわば世論に引きずり降ろされた形の小沢一郎氏が党内で恐縮するふうもなく、全身躍動する光景は不思議である。

代表選挙の方法も日程も小沢氏が主導し、自身の影響力を保ちやすい方向で決められたと報じられている。氏がヘソを曲げて集団離党でもすれば、屋外から党批判の小便を浴びせる側に回りかねない。献金疑惑の説明もしない人に党内が勝手を許すのは、“壊し屋”伝説に恐れをなしてのことだろう。

せわしない選挙日程には、各紙の世論調査で小沢批判が噴き出す前に との思惑もあると聞く。民主党ほど「民意」の一語を多用する政党はないが、これからは多少なりとも恥ずかしそうに使ってほしいものである。

小便の格言が似合うようでは、「自民党より清潔」という宣伝文句もいささか怪しくなってくる。

<リンドン・ベインズ・ジョンソン(1908-1973)>

アメリカ合衆国第37代副大統領および第36代大統領。

ジョン・F・ケネディの暗殺の直後に政権を引き継いだ大統領。リベラルなケネディと対照的に、ジョンソンは民主党の中では保守的な人物として知られたが、公民権運動に対しては深い理解を示し、公民権法の施行に向けて議会をまとめるなど積極的に貢献した。



国内政策の政治力ではフランクリン・ルーズベルトと並ぶ敏腕大統領であり、公民権法の施行を推進し非白色人種の差別是正に貢献したものの、対外的にはベトナム戦争に深く介入し国内の反戦運動の激化を招いた。

### 余禄：「民主党代表選」(5/15)

「この勇気と武勲と大胆さを持つ輝かしい騎士は、いったん冑（かぶと）を取れば、礼儀と忠誠と寛大の人になる。彼は戦場でも宮廷でも立派な人物だ」。騎士道華やかな13世紀、仏詩人が書き留めた馬上試合の勝ち名乗りだ。

今は勝ち抜き戦を意味する「トーナメント」はこの騎士の馬上試合を示す言葉だ。ただすべて騎士道精神通りとはいかない。試合用剣と間違えたふりをして真剣で遺憾のある相手を殺したり、興奮した集団同士が本格的戦闘を行うこともあった（R・バーバー著「騎士道物語」）。

馬上試合といえば長やりの一騎打ちが思い浮かぶが、あれはトーナメントの一部という。本体は団体戦で、初期には相手の武具や馬、果ては人質を奪い合う大乱戦を繰り広げた。文字通りの生き残りを懸けることもあったトーナメントだった。

さて政権を懸けたトーナメント決勝が総選挙なら、準決勝にあたる民主党代表選が鳩山由紀夫幹事長と岡田克也副代表の一騎打ちで争われる。もっともこちらのトーナメントも実質は党内諸グループ入り乱れての団体戦の色彩が濃厚である。

というのも鳩山氏が小沢一郎代表に近いグループの支持を固める一方、代表と距離を置くグループの支持が岡田氏に集まったからだ。その結果、投票権を持つ議員の間では鳩山氏が優勢、世論調査では岡田氏の人気勝るという党内力学と世の風向きのギャップも鮮明になった。

小沢代表という出場しない騎士の名ばかり取りざたされる奇妙なトーナメントも、すべては決勝戦の勝利のためだ。乱戦でのその騎士道精神のほどは、決勝の審判にあたる有権者がじっくり目をこらしているのをお忘れなく。

<リチャード・バーバー（1941-）>

英国の歴史家。

学生時代より中世の歴史や文学の分野の研究を続け、ロチェスター大学における大学出版を手始めに、ポイデル・プレス（後のポイデル&ブルーアー社）などで中世の研究・出版を手がけ、1961年『アルピオン（イギリスまたはグレートブリテン島の古称）のアーサー』を出版、アーサー王の歴史と伝説で優れた功績を残す。

その他、歴史上の人達の伝記『プランタジェネット王家（英国の王家（1154-1399））のヘンリー』『エドワード黒皇太子』『ウェールズ及びアキテーヌのエドワード皇太子』などを出版、1971年には『騎士と騎士道』を首題とした歴史と文学の中間のジャンルに属する作品でサマセットモーム賞を受賞。『聖杯：想像と信念』ではUKプレスの論評で賞賛を得ると共に、ニューヨーク・タイムスやワシントン・ポストでも好評を博す。

日本では高宮利行訳の『アーサー王：その歴史と伝説』が有名。

### < 騎士道物語 >

中世ヨーロッパに発展した文学のジャンルで騎士道をテーマとする韻文および散文の物語。ロマンス、騎士道ロマンス、騎士文学、騎士道小説ともいわれる。騎士の武勲や恋愛を取上げている。

11世紀頃からフランスを中心に発達し、吟遊詩人により歌われた。それまでのラテン語ではなくフランス語、スペイン語などのロマンス諸語で書かれたという点も重要である。つまり重々しさのない言葉で語られた。後に恋愛小説を意味することになる「ロマンス」のはしりとなる。

本来は騎士の武者修業について書かれた物語であるが、典型的なストーリーは、騎士が見知らぬ土地を冒険し、美しい貴婦人の為に住民達を苦しめる強大な敵(しばしばドラゴンや巨人といった想像上の怪物を含む)を倒し王に認められるというもので、ヒロイック・ファンタジーや恋愛小説の原型といえる。

騎士道物語は16世紀までが最盛となるが、その後下火となる。17世紀、セルバンテスによる、騎士道物語をパロディにした小説『ドン・キホーテ』がその画期と見なされている。

現在では騎士道及び騎士というテーマ性から扱われる事が多く題材にした様々な形での作品が作り上げられている。

